

海部のふるさとマップ

～ 海陽町編 ～
海南 kainan

海南年中行事

- 1月 左義長
(毎年 1月15日頃)
- 6月 樫ノ瀬の虫送り
(毎年 6月第1日曜日)
- 7月 大砂海水浴場
海開き
(毎年 海の日の前の土曜日)
- 8月 浅川港祭り
(毎年 8月1日)
- 轟夏祭り
(毎年 7月第2日曜日)
- 10月 大里八幡神社秋祭り
(毎年 10月第3日曜日)
- 11月 海陽町商工産業祭
(毎年 11月第1週頃)
- 轟秋祭り
(毎年 11月第2日曜日)



お問い合わせ先

海陽町役場

〒775-0295
徳島県海部郡海陽町大里字上中須 128
TEL (0884) 73-1234(代)
<http://www.town.kaiyo.lg.jp/>

海陽町観光協会

〒775-0502
徳島県海部郡海陽町久保字板取 219-6
道の駅「穴喰温泉」内
TEL (0884) 76-3050
<http://www.kaiyo-kankou.jp/>

海陽町教育委員会

〒775-0202
海陽町四方原字杉谷 73 番地
海南文化村内
TEL (0884) 73-1246

生涯学習施設



阿波海南文化村

海陽町四方原字杉谷 73 TEL (0884) 73-3100
休館日: 毎週月曜(祝日の場合翌日)・年末年始(12月29日～1月3日)



海陽町立博物館

海陽町四方原字杉谷 73
TEL (0884) 73-4080
休館日: 毎週月曜(祝日の場合翌日)
年末年始(12月29日～1月3日)

阿波海南文化村の海陽町立博物館には、海部刀や、大里古銭、大里古墳などに関する展示があります。(企画展も随時開催)

アクセスマップ

- 徳島市内から車で(国道55号)高知方面に約1時間50分
- JR徳島駅(特急)から海南駅まで約1時間30分
- 高速バスで徳島市まで
徳島・大阪間/約2時間30分 徳島・新神戸間/約1時間50分
徳島・京都間/約2時間50分 徳島・関西国際空港間/約2時間40分
- 高知方面から
高知市から車で約3時間10分。室戸岬から車で約1時間10分。



区分	種別	名称	所在地	所有者・管理者等	指定年月日	概	要
県指定	史跡	大里古墳	大里	海陽町教育委員会	S27. 6.25	6世紀から7世紀初めにかけて造られた古墳で、直径20m、高さ4～5mの円墳である。墳丘の内部に横穴式石室を設け、那佐湾周辺の那佐石が使われている。海部川下流域周辺の有力な海部（あまべ）の長を葬った古墳であろうと考えられる。県史跡第1号に指定された。（表紙写真上）	
	文化財	御崎神社の梵鐘 ^{みさき}	四方原（町立博物館）	御崎神社	S57. 1.29	高さ41.1cm、口径27cmの小型の鐘で、青銅でできている。乳と呼ばれる突起が全部で36個あり、ひとつも脱落がない。梵鐘の銘には「永享四年十一月」の紀年が刻まれ、1432年、室町時代の製作と分かる。現存する徳島県内最古の梵鐘である。海陽町立博物館に展示している。	
	天然記念物	蛇王のウバメガシ樹林 ^{どお}	浅川	海陽町	H 3. 9.27	蛇王神社の森一帯にひろがるウバメガシの樹林は、昔から魚の保護や繁殖のための魚付保安林として保護されてきた。そのため、古いウバメガシがそのまま残された自然樹林を形成している。ウバメガシは西日本に広く分布する照葉樹林帯の植物で、備長炭の材料として知られる。	
	天然記念物	加島の堆積構造群露頭	浅川	海陽町教育委員会	H17. 5. 6	浅川湾の北岸にある加島の北側海岸と海中の地層の表面には、太古の時代にできた水流や古生物の生態を示す底痕が化石となって残っている。新生代古第三紀（2,400万～6,500万年前）の地層で、ここでは底痕を含む堆積構造全般が見られる。現地は潮が引くとよく観察できる。	
町指定	文化財	薬師如来出現の図（絵馬）	浅川	千光寺	S33. 2.21	浅川の千光寺本堂に、薬師如来出現の図を描いた縦100.0cm×横157.0cmの絵馬が掲げられている。画面右下に「天保甲辰仲夏謹拝写 春孝松浦重吉（印）」とあり、この画は阿波の絵師松浦春孝が、天保15（1844）年に千光寺縁起を写したものであることが分かる。上下2枚の横材を中央で刈ぎ合わせ、周囲に幅9cmの額枠をもつ彩色の絵馬である。	
	文化財	不動明王立像	浅川	個人	S33. 2.21	不動明王は大日如來の使者教令論身、如來の教勅を受けて直接に一切衆生教化する姿といわれる。この立像は、一木造り、胴を大きく右に捻り、彫眼、顔に忿怒相を表し、元來は彩色らしいが、現在は剥落している。像高75.5cm、頭に八葉蓮華を置き、左に一髻（弁髪）を垂らしている。右手に降魔の剣（剣は後補）、左手に藕索を持ち、条帛と裳を着けている。	
	文化財	鰐口 ^{かにぐち}	大里	個人	S33. 2.21	鰐口は、神社や寺院の堂前、軒先に掛ける鳴らしものの一つで、金口、金鼓、打金などと呼ばれている。青銅製で円形な扁平体をなしている。面の径24cm、口唇（下方に長く割れた口）の長さ37cm。銘文に「タ州井志郷新光寺鎮守留通物 貞治三年甲辰年七月廿二日尊」とある。貞治3（1364）年、南北朝時代のものである。	
	文化財	鰐口	四方原（町立博物館）	光照寺	S33. 2.21	この光照寺の鰐口は、円形扁平体の青銅製。面の径22cm、厚さ8.5cm。銘帯の銘文を分かり易く書き直すと、「応永四丁丑季十月廿五日敬白 道奎」とある。道の下の文字奎は難読であるが、僧侶の名であると考えられる。応永4（1397）年は室町時代のもので、当地方の文化を知る貴重な資料である。	
	文化財	石斧	四方原（町立博物館）	海陽町教育委員会	S33. 2.21	この石斧は、明治37（1904）年、浅川の大歳神社の裏山で浅川カネが発見した磨製石斧である。長さ19.5cm、幅6.4cm、厚さ4.2cm。刃が鋭利に尖る石斧の代表的なもので、見事に研磨された砂岩質の蛤刃石斧である。	
	文化財	大里一号古墳出土品	四方原（町立博物館）	海陽町教育委員会	S33. 2.21	昭和7年8月、海陽町大里字浜崎81番地で、土砂採取中に発見された大里一号古墳の出土品である。古墳の原形は残されていないが、現在は敷地内に小さな祠が建てられている。太型の耳環1、細型の耳環2、管玉1、切子玉2、丸玉3、鉄鍬4が現存する。	
	文化財	大里二号古墳出土品	四方原（町立博物館）	海陽町教育委員会	S33. 2.21	昭和26年8月、大里二号古墳発掘調査の時に出土した遺物である。小提瓶と斜線模様の入った壺は羨門の右側より発掘され、玄室の四隅に対称的に高杯・平瓶・杯がおかれていた。遺物の年代は、副葬品や横穴式石室の調査より、6世紀から7世紀にかけての時期と考えられる。耳環1、杯蓋2、杯身3、碗1、高杯蓋1、有蓋高杯身2、無蓋高杯1、提瓶1、平瓶1、壺1が現存する。	
	文化財	四方原開拓の幟と定書	四方原	個人	S33. 2.21	この定書は、寛永14（1637）年、蜂須賀忠英が長谷川越前守を通じて郡奉行に下した指令書である。寛永14年より土佐小川村の野村惣太夫三名が、原野を新田開発した。細地に白で乃一と染め抜いた旗印のもとに、血のにじむような困難な開拓事業を行ったといわれている。この幟は、木綿で縦105cm、横70cmの長方形、地色は藍色で、中央に白で丸の中に乃一と染め抜かれ、縦に四か所、上に三か所の乳がつけられている。	
	天然記念物	ムクノキ	浅川	個人	S43.12.23	ニレ科の落葉高木で、古くはその材で造船を始め各種の用途に使われ、葉は木材を磨く材料になってはならないものであった。ムクノキの木は樹皮は灰褐色、果実は球形で約1cmの核果になり、秋には紫黒色に熟する。この木の推定樹齢は、約450年。目通幹囲4.82m、根元周囲6.70m、樹高20.0m、枝張東西5.5m、南北23.1mである。	
	天然記念物	タブノキ	大里	個人	S43.12.23	クスノキ科の常緑高木で、材では船を造ったほか、皮は煎じて染料にしたり、また線香を作り、実からは蠟を採るなどいろいろな用途があった。七月ごろ、紅花は花柄をつけて、球形の果実が暗紫色に熟してくる。この木の推定樹齢は、約400年。目通幹囲4.55m、根元幹囲5.60mである。この周辺には他にも、タブノキの巨樹が見られる。これらは風害を避けるために植えられたものといわれている。	
	文化財	大里古銭七万枚と甕一	四方原（町立博物館）	海陽町教育委員会	S61. 4.22	昭和54（1979）年、新築工事現場での掘削中に発見された。掘り出された大甕には総数70,088枚の銅銭が入っていた。主に宋銭など中国で造られた渡来銭が大半である。南北朝時代（14c後半）頃の埋藏銭とみられ、数は四国一である。	
	天然記念物	ジュンサイ	若松	若松部落	S63. 3.27	ジュンサイ（ヌナフ）は大陸性の植物といわれ、池や溝に生える多年生の水草である。幼茎や若菜には寒天の様な粘着物がまといついており、春から夏にかけて粘着物を被って巻いた新葉は食用となる。本県でも比較的温度の低いところにその自生がみられるが、県下でも数少ない自生地で、現在のところ分布上からいっても南限にある。	
	文化財	柳後亭其雪作「竹に鶴」 ^{りゅうごていきせつ}	吉野	個人	H 3. 9.26	阿波薄墨により、竹を背景に一羽の鶴を大きく描いた作品で、作者は柳後亭其雪（1788～1842）である。其雪は海陽町大里字飯持の鶴和家に生まれ幼少の頃は金次といい、成人して省吾といった。阿波を代表する俳人で俳号を柳後亭其雪といった。この作品は其雪の水墨画技能の非凡さを知る代表作である。縦136cm、横46.5cm。	
	文化財	三木（幹）恒山作「梅に雀」	吉野	個人	H 3. 9.26	梅と雀が描かれた水墨画の作品で、作者は三木（幹）恒山（1811～1891）。牟岐出身の画人である。京都に出て医学を学んだ。傍ら岸駒につき画を学び、後、医を止め画に専念した。花鳥人物及び虎の画にすぐれ、比較的多くの作品を残している。この作品には、郷土の俳人柳後亭其雪が「先ちゅうと 鳴くぞめでたし 今朝の春」と吟じ、恒山が梅に雀を描いている。縦120cm、横28cm。	
	文化財	三木（幹）恒山作「鍋かぶりの図」	吉野	個人	H 3. 9.26	この作品は藍を使った水墨画で、「鍋かぶり参社図」といわれる民俗的風俗画である。恒山が諸国を遊歴した際に描いた作であろうか。滋賀県坂田郡米原町の筑摩神社に祭礼行事として残されているといわれる。	
	文化財	刀 阿州海部住氏吉文久三年二月吉日 ^{かいふしゅうじよし}	四方原（町立博物館）	個人	H 3. 9.26	表銘 阿州海部住氏吉、裏銘 文久三年二月吉日。長さ75.7cm、反り1.8cm。目釘孔3個（内一つ埋める）。形状は鎬造、庵棟、重ねやや厚く、反り浅く、先反りがつき、中鋒となる。新々刀期幕末の典型的な刀で、阿波拵（打刀拵）が付いており、伏見の百人切りの伝説をもつ刀である。	
	文化財	脇指 阿州海部住氏吉（刀身銘）	四方原（町立博物館）	個人	H 3. 9.26	銘（刀身銘）阿州海部住氏吉。長さ36.0cm、反り1.6cm。目釘孔1個。形状は片切刃造、棟平丸、身巾細く、重ね厚く、反り深い。この脇指には海部椿養鞘拵の典型的なものが付いており、この手の刀身銘のある片切刃の海部刀を「海部包刀」と通称していた。地刃、銘、外装とも極めて健全であり、資料的にも貴重である。（表紙写真下）	
	文化財	短刀 海部氏宗永正二年八月日 ^{うじむね}	四方原（町立博物館）	個人	H 3. 9.26	表銘 海部氏宗、裏銘 永正二年八月日。長さ23.0cm、反りなし。茎長さ9.5cm。目釘孔1個。形状は平造、庵棟、身巾細く、重ね薄く、尋常、先わずかにかえり、内反り。海部古刀期の代表作で、一見相州伝とみられる作風である。	
	天然記念物	エノキの板根 ^{ばんこん}	大里	個人	H10. 4.27	このエノキは幹周が地上1.3mのところで3mあり、根が地上に浮き上がり板のようになっている。それで板根といわれ、たいへん珍しい。根の幅（高さ）は幹に近いところで1.1mはある。板根で有名なのは西表島のサキシマスオウノキという熱帯性植物で、幅は3m以上もある。	
	名勝天然記念物	帆ヶ島 ^{おけじま}	浅川	徳島県	H11. 1.27	帆ヶ島の周囲は33.4m、高さ8.5mで、頂上に松やウバメガシ、ヤマモモ、ヒトツバなど木本10種28本・草木5種計15種が確認された。小島における植物の観察場所として貴重である。大砂海水浴場の西端にあり、自然工法による補修工事を行い保存されている。	
	文化財	石碑「四方原開拓の偉大なる先人名門野村氏一族郎党三十六名と元山内家臣御旗奉行田村半之丞由來之碑」 ^{（万三）} 開拓の旗復元の碑	四方原	海陽町	H13. 7. 7	阿波人が成し得なかった困難極まる四方原開拓を成し遂げた三十余名の先人、土佐武士（ものゝふ）に対する供養之碑で、碑文は二千字に及ぶ。開拓当時野村惣太夫は25歳、元山内土佐守一豊公家臣御旗奉行であった田村半之丞（故あって浪人）は51歳で、志あって四方原開拓に参加、開拓の旗印丸に乃一の旗を考案したともいわれる。九州の銘石天山石総重量50トン級の石碑で、四方原用水に面した場所に建てられた。	

大里

御鉄砲と大里迷路

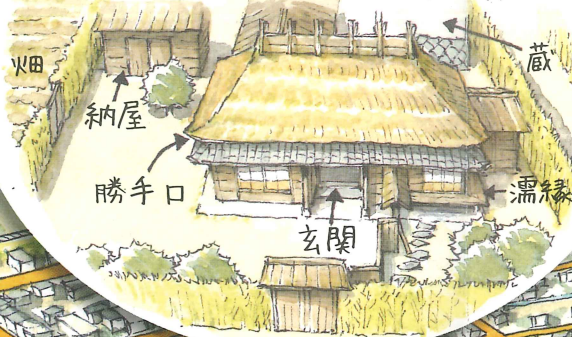
散策絵地図

「四方原開拓文碑」
四方原一帯は寛永14年
から20年を費やし「野村
惣太夫」らによって
開拓されました。

「JR阿波
海南駅」

「長屋門」をもつ
屋敷敷地内には、町指定
天然記念物の「タヅノキ」が
あります。

「御鉄砲屋敷」想像図
現在の主屋は明治初期に建てられた
ものですが、御鉄砲当時は「かやぶき茅葺」
だったと思われます。上士を迎えるため「玄関
構え」であり、側面に「勝手口」があるのも特徴です。



藩からの扶持米と
仕事(役)による御役料
だけでは食べていけない
ので、敷地内を火田に
して自給自足をして
いたといひます。

阿波海南文化村
「海陽町立博物館」には「大里
古墳」や「大里古銭」などの関係資料を
はじめ、南北朝時代に海部川流域で発生
した阿波の名刀「海部刀」が46点展示されて
います。



新刀期に多い片切刃造りの脇指
は「海部包丁」とよばれて
います。

「和奈佐意富曾神社」
郡内唯一といわれる
「式内社」です。

「中宮神社(合祀)」

「大里八幡神社」
秋祭りは県下一勇壮な祭り
といわれ、関船やダンジリが
見事です。



「昔の善蔵川」
明治期には、大里村だけで30艘の耕作舟
があり、善蔵川の水運を利用していた
ため、多くの舟着き場がありました。
日常の洗い場としても
利用。

史跡
「大里古銭」出土地
の碑があります。

大里古墳(大里2号墳)



6世紀末から7世紀初め頃に造られた
もので、直径約20m、高さ4~5mの円墳
です。10m以上の「横穴式石室」をもつ
貴重なもので、県指定の
史跡第1号です。

この場所は、藩政
時代後期より、下級武士
の子弟のための「郷学校」
が設置されていました。

一宮神社

見事な洋風木造
建築(擬洋風)です。



鉄砲の名人
「来條義盛」の墓碑
があります。

御鉄砲の
「射場」跡

寒竹はたたいて
繊維を採り、火縄の材料
にもなりました。
火縄→



「御鉄砲」が敷地の垣や
小路(路地)に「寒竹」を植えたことで
形成された「大里迷路」はこの町の最大の見物要素
です。寒竹は3mほどにもなるので、密生すると全く見通しが
利かなかったといひます。



「朝迷い込んできたお通路さんが、昼にまた同じ所に
回ってきた」という話が残っているほどです。

大里は、海部川河口北岸に位置する町です。「大里海岸」に程近い
砂地状の台地からは「大里古墳群」が発見され、その規模から
6世紀末には、海部川下流域を支配する大きな勢力をもった豪族
が存在していたと考えられています。また同地域からは、南北朝
時代頃とみられる大量の埋蔵銭(渡来銭など)7万枚余りが発見
されていることから、古来より大里の人々が、発達した航海術を
駆使し広く交易をおこなっていたことがうかがえます。
近世に入ると、海部川河口南岸に「鞆城(海部城)」が築かれ、
藩政時代初期には、阿土国境の警備のために「御鉄砲」と
呼ばれる下級藩士(84戸)や「判形人」と呼ばれる橋泊の水軍
(27戸)が「浜崎」一帯に配置されました。「御鉄砲」たちの
屋敷は広い敷地を有し、その周囲と路地にはおのおの「寒竹」
が垣として植えられていたために、同じような竹垣が両側に連なる、
複雑で見通しの利かない「迷路」のような屋敷町が形成された
といひます。これは、敵が攻めてきたときには竹垣による「見通し
の悪さ」を利用して身を守る一方で、味方勢は「槍」や「火縄銃」
を竹垣に差し込み撃つことができ、垣を押し広げると、どこから
でも自在に屋敷内に入ることができるという利点も兼ね備えて
いました。明治以降になると、刈り込みの手間がかかる竹垣に
代わり「榎(イヌマキ)」が植えられるようになりましたが、今なお
残る生垣の連なる小路(路地)からは、希有な歴史を歩んできた
屋敷町としての風情を感じることができます。